

3) 当院における乳癌超音波検査について

武田 敬子 (済生会新潟第二
病院放射線科)
川原聖佳子・石崎 悦郎
相場 哲朗・川口 正樹 (同 外科)
石原 法子 (同 病理)

済生会新潟第二病院において1993年1月から1996年5月の間に手術された乳癌59例中、超音波所見の検討可能な症例は46例であった。

46例の病理組織診断は非浸潤癌4例、初期浸潤癌3例、浸潤癌39例、摘出標本上の腫瘍最大径は0.6~11cm(平均3.7cm)であった。

術前超音波診断は、乳癌40例、乳管内腫瘍3例、乳癌疑い2例、良性腫瘍1例であった。超音波検査上腫瘍最大径過小評価は9例で、6例は非浸潤癌又は非浸潤性部分の多いものであった。非浸潤性部分の超音波対象として、①比較的低エコーの小結節集簇、②境界不鮮明な乳腺エコーの乱れが認められた。

4) Helical CT による乳癌診断

植松 孝悦・酒井 邦夫(新潟大学放射線科)
椎名 真・小林 晋一(新潟県立がんセン
ター放射線科)
清水 克英
佐野 宗明・牧野 春彦(同 外科)
本間 慶一 (同 病理)

[目的] ヘリカル CT (HCT) を用いて乳房温存療法で問題となる乳管内進展 (DS) と多発の検出能について検討した。[方法] 造影剤 90 ml を 1.5 ml/秒で投与した場合の至適スキャン開始時間を乳癌12症例で検討した。その結果をもとに造影剤注入開始後70秒にX線ビーム幅 3mm, pitch=1 で腫瘍と乳頭を含める範囲を HCT にて撮像した。対象は95年6月から12月までに病理学的確定診断のついた浸潤性乳管癌84例である。[結果] DS and/or 多発の sensitivity 76.3%, specificity 89.1%, accuracy 83.3%。[結論] 1. HCT による DS と多発の検出は可能であり有用。2. 三次元画像は術者の病変把握と患者への説明に有用と思われる。

5) 乳癌の微小進展巣検出におけるヘリカル CT の有用性

牧野 春彦・佐野 宗明
佐々木壽英・田中 乙雄
梨本 篤・筒井 光廣(新潟県立がんセン
ター外科)
土屋 嘉昭
植松 孝悦・椎名 真(同 放射線科)
本間 慶一・根本 啓一(同 病理)

乳癌に対する乳房温存療法 (BCT) の適応を決定する際には、広範な乳管内進展 (DS) を伴う症例を術前に診断することが重要である。今回、ヘリカル CT (CT) の乳管内進展に対する診断特性および乳房温存療法の適応決定における有用性を検討した。[対象・方法] 1. 原発乳癌症例67例を対象として乳管内進展に対するマンモグラフィ (MMG) と CT の DS に対する診断特性を検討した。2. 触診, MMG にて BCT の適応と思われた29症例に CT を施行し、腫瘍外微小進展巣の有無を検討した。[結果] 1. DS に対する sensitivity は MMG 46% (11/24), CT 79% (19/24) と CT で良好であった。specificity は MMG 95% (41/43), CT 81% (35/43) であった。2. 29例の最終的な術式は lumpectomy 14例, quadrantectomy 10例であったが、CT 所見により乳房切除術に術式変更した症例が5例あった。5例の腫瘍外進展様式は DS 4例, 広範なリンパ管浸襲1例であった。

6) 血性乳頭異常分泌を呈した4症例の検討
—診断・治療および病理について—

田島 健三・若桑 隆二
岡村 直孝・草間 昭夫(長岡赤十字病院)
諸田 哲也・山崎 哲(外科)
広田 雅行 (同 小児外科)

血性乳頭異常分泌を呈した4症例について、診断・治療および病理組織学的検討を行い、次の結果を得た。

- 1) 分泌細胞診は頻回に行う必要があるが、分泌細胞診のみでは癌を否定できない。
- 2) 乳管造影は、乳管内の病巣の存在診断に有用である。
- 3) 病巣が疑われる場合は積極的に生検 (乳管区切除術, 乳管腺葉切除術) を行い、病理組織学的検索で確認することが大切である。
- 4) 血性乳頭異常分泌症例4例のうち、2例に癌が認められた。